

極上にして最悪のタン料理 哲人イソップはしたたか者

「イソップ物語」は、別名「アイソポス風寓話集」とよばれているように、紀元前六世紀ごろギリシヤに実在したとみられるアイソポスなる人物が、動物寓話の形を借りて奉公人の処世術を説いたものである。

たとえばある女主人は、まだ暗いうちから、ニワトリが鳴くやいなや召し使いをたたき起こしてこき使うので、召し使いはニワトリさえいなければもつと朝寝ができるだろうと、こつそりそれをしめ殺してしまった。ところが女主人は、このため時間の見当がつかなくなり、かえつてもつと早く召し使いをたたき起こして使うようになったといつたたぐいの教訓話が並んでいる。つまり、一種の“長いものには巻かれる”思想で、これはかつて、アイソポス自身が奴隷であったためではないかとみる人もあるぐらい。が、その語り口から巧まずして生まれ出ているユーモアは、やはり第一級のものといわなければならない。アイソポスは、いわゆる解放奴隷で、解放されるまでは哲学者のクサントスに仕えた。そして当時、料理は奴隷の仕事のひとつであった。

あるとき、主人のクサントスが「明日は大事な客を招いてあるので、料理は極上のものでばかり出してくれるように」と命じた。

ミーティング de meet

焼きものの特徴

焼きものは、放射熱または、熱したフライパンや鉄板など金属板の伝導熱で比較的高温で加熱する調理で、肉の持ち味を最高に引き出す調理法です。

肉の表面は高温に接しているのですが、その内側は外部からの熱伝導による温度の上昇に過ぎず、水分があるので高くなっても八十〜九十度程度なので表面はカリツとしても内部分はしっかりと保たれます。

当日、アイソープスは舌の料理ばかりを出した。どれもこれも舌をメインにした料理なので、みんながうんざりして理由を聞くと、「極上のものでばかり出せとの仰せなので、舌ばかりにしました。都市が建ったり、文化が進んだり、人々を教育したり、人を説得したり、また会談がスムーズに進行したり、なによりも、人間の第一の義務である神をたたえることができるのも、これすべて舌があるおかげです。この世にこれ以上のものがあるでしょうか」

後日、別の客を招待することになって、今度はクサントスは多少の茶目つ気も交えて「何でも悪いものばかり出してくれ」といった。すると、アイソープスは、また舌の料理ばかり出したのだった。理由を聞くと、「まことに舌は悪いもの。神をたたえる一方で神をののしり、舌一枚で裁判ざたを引きおこし、反目と論争を生む。一方では真理の器官であると同時に、他方ではまちがいのものと、中傷の道具ともなり、戦争さえ引きおこす」と。かくて、主客ともどもその弁舌に舌を巻いたのだった。